



オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン

ODNJP 会報 No.1

2017.04.05

# Open Dialogue Network Japan

Newsletter No.1 (April 5, 2017)

01. 会報について
02. 規約
03. 運営委員会・委員会名簿
04. 沿革
05. 総会報告
06. 運営委員会報告
07. 主催イベント報告
08. 今後のイベント紹介
09. 運営委員による寄稿
10. オープンダイアログに関する海外の動向
11. メッセージ Messages
12. Open Dialogue Network Japan - Overview

## もくじ

01. 会報について	p. 03
02. 規約	P. 03
03. 運営委員会・委員会名簿	P. 04
04. 沿革	P. 04
05. 総会報告	P. 05
06. 運営委員会報告	P. 05
07. 主催イベント報告	P. 06
08. 今後のイベント紹介	P. 08
◆ 「未来語りのダイアログ」講演会	
◆ オープンダイアログ・トレーニングコース — ダイアログ実践の基礎コース —	
◆ トレーニングコース関連イベント	
・ オープンクラス	
・ 特別講演	
09. 運営委員による寄稿	P. 10
「事の始まり・電光石火の産声ーオープンダイアログネット」大熊 由紀子	
「イタリアのオープンダイアログ	
トリエステ・ドーミオ地区精神保健センター所長、	
精神科医 ピーナ・リデンテ (Pina Ridente) さんに聞く」大熊 一夫	
10. オープンダイアログに関する海外の動向	P. 12
2016～2017年 片岡 豊	
11. メッセージ Messages	P. 13
Jaakko Seikkula	
Tom Erik Arnkil	
Nick Putnam	
保坂展人	
12. Open Dialogue Network Japan - Overview	P. 14

## 01. 会報について

オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン (ODNJP) 会報 No. 1 をお届けします。ODNJP は 2015 年 3 月開催のオープンダイアログ研究連絡会議をきっかけに発足しましたが、2016 年 6 月に第 1 回総会を行い、7 月 9 日に運営委員会での決定を経て規約を制定し、会員制のネットワークとして再出発しました。この間、セミナーや実践報告会などを開催してきましたが、本年 5 月からは、トレーニングコースが開始されます。会報の発行は規約において定められた本ネットワークの重要な事業で、ODNJP の活動を会員の皆様や外部に向けて広くお知らせすることを目的としています。ODNJP が活動を行ってきたこの 2 年間の間に、日本ではオープンダイアログ関連の書籍や論文、特集記事が次々と発表され、日本の精神医学・精神保健福祉や関連領域において、その認知度はかなり高まってきたのではないかと思います。また、海外でもイギリスやオーストラリア、イタリアなどで新たな展開があり、オープンダイアログは国際的な注目をさらに高めつつあります。ODNJP の組織のあり方や性格、ミッションなどについてはなお流動的です。本会報がこれまでの活動を振り返り、ODNJP の今後や日本におけるオープンダイアログの展望について議論するための手がかりとなることを願っております。(編集委員長・石原 孝二)

## 02. 規約

オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン規約

2016 年 7 月 9 日制定

(名称)

第 1 条 本ネットワークは「オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン」と称し、英語名は Open Dialogue Network Japan とする。略称は ODNJP とする。

(目的)

第 2 条 本ネットワークはフィンランド西ラップランド地方を中心に開発されてきたオープンダイアログ・アプローチに関する情報提供や研修を行い、日本における質の高いオープンダイアログ実践の普及に貢献することを目的とする。

第 3 条 前条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- (1) フィンランドおよび他国のオープンダイアログに関する組織との連携
- (2) セミナー、講演会、トレーニングコースなどの実施
- (3) 会報の発行
- (4) その他必要とされる事業

(会員)

第 4 条 会員の種別は正会員(個人)、賛助会員(個人または団体)、名誉会員とする。

第 5 条 本ネットワークへの入退会の手続き方法は運営委員会が定める。

第 6 条 正会員は総会に出席する権利と総会における議決権を持つ。

(会費)

第 7 条 正会員の年会費は 6,000 円とし、賛助会員の年会費は 1 口(3,000 円)以上とする。名誉会員からは年会費は徴収しない。年会費の有効期限は支払い時期にかかわらず、会計年度末までとする。

(運営組織)

第 8 条 本ネットワークに共同代表若干名、運営委員若干名、事務局長 1 名をおく。

第 9 条 共同代表、運営委員、事務局長は運営委員会を構成し、運営委員会は本ネットワークの運営に関わる重要事項の決定を行う。

第 10 条 共同代表は本ネットワークを代表し、事務局長は事務局を統括する。共同代表および事務局長は本ネットワークの日常業務に関する決定を行う。事務局は会費およびセミナー等に関する会計業務を行う。

第 11 条 運営委員会は個別の業務を統括する各種委員会を運営委員会の下に設置することができる。

(総会)

第 12 条 総会は次年度の役員(共同代表、運営委員、事務局長)の選出、規約の改正、次年度の活動基本方針の決定など、本ネットワークの方向性に関わる重要事項の決定を行う。

第 13 条 運営委員会は総会において、当該年度の活動経過報告および会計報告を行う。

第 14 条 総会は原則として年 1 回開催することとし、必要に応じて臨時総会を開催する。

第 15 条 総会の成立要件は正会員出席者数および正会員委任状提出者数が正会員数の過半数を超えることとする。

附則 本規約は 2016 年 6 月 18 日に開催された第一回総会の決定にもとづき、運営委員会での審議を経て定められたものであり、2016 年 7 月 10 日より適用する。

附則 2 本ネットワークの会計年度は 4 月 1 日より 3 月 31 日までとする。

### 03. ODNJP 運営委員会・委員会名簿

(2017年3月31日現在)

#### 【運営委員会 (26名)】

**共同代表** 石原孝二、片岡豊、斎藤環、高木俊介  
**運営委員** 植村太郎、大井雄一、大谷保和、  
大熊一夫、大熊由紀子、笹原信一朗、  
下平美智代、商 真哲、白石正明、  
白木孝二、神保康子、竹端寛、田村毅、  
野村直樹、三ツ井直子、向谷地生良、  
村井美和子、森川すいめい、森田展彰、  
矢原隆行、渡邊 乾

**事務局長** 時盛昌幸 (2016年7月～)

**名誉会員** Tom Erik Arnkil、Jaakko Seikkula  
(2016年7月～)

#### 【各委員会】

##### トレーニングコース実施委員会

片岡豊、斎藤環、白木孝二、福井里江、森田展彰、  
三ツ井直子、村井美和子、森川すいめい、渡邊 乾  
設置日 2016年9月12日 (第1回運営委員会)

##### 広報委員会

大熊由紀子、白石正明、神保康子、石原孝二  
設置日 2016年9月12日 (第1回運営委員会)

##### 会報編集委員会

神保康子、石原孝二 (委員長)  
設置日 2017年1月8日 (第3回運営委員会)

##### 運営委員会オブザーバー

宮本有紀、西村秋生、福井里江

### 04. 沿革

2015年3月30日 オープンダイアログ研究連絡会  
議開催 (ネットワーク発足)

2015年9月1日・2日 ケロプダス病院視察 (共催)

2015年9月5日 (暫定) 代表選出 (斎藤環)

2015年11月29日・12月1日 オープンダイアロー  
グセミナー (東京、大阪) 開催

2016年5月13日-15日 オープンダイアログワー  
クショップ (東京・共催) 開催

2016年6月18日 第1回総会 共同代表・運営委員・  
事務局長選出、規約案検討

2016年7月9日 規約制定

2016年9月1日-10日 ケロプダス病院視察 (共催)

2016年10月15日 シンポジウム「オープンダイア  
ログ～日本での展開～」(共催)

2016年11月20日 第一回オープンダイアログ実  
践報告会

2016年4月29日 「未来語りのダイアログ」講演  
会 (予定)

2017年5月～ トレーニングコース (基礎コース) 開  
始 (予定)

### 05. 総会報告

2016年6月18日 (土) 17時～20時

東京大学駒場Iキャンパス 18号館コラボレーショ  
ンルーム1

ODNJP 第一回総会が2016年6月18日 (土) に行われ、  
以下のことを決定しました。

- ・共同代表、運営委員、事務局長の選任
- ・規約の制定 (運営委員会のメール審議により7月9日  
に確定・制定しました。)
- ・シンポジウム、実践報告会の開催
- ・トレーニングコースの実施

### 06. 運営委員会報告

第1回 2016年9月12日

- ・事務局より現在の会員数と予算状況について報告。
- ・オープンダイアログ視察研修 (2016年9月1日～  
10日) の参加者より研修の報告。
- ・トレーニングコース実施委員会の発足について議論。出  
席されていた片岡豊さん、斎藤環さん、白木孝二さん、森  
田展彰さん、三ツ井直子さん、村井美和子さんがその場で  
委員として決定された。その後、福井里江さん、森川すい  
めいさん、渡邊 乾さんが追加で委員として決定された。
- ・広報委員会の発足について議論。大熊由紀子さん、白  
石正明さん、神保康子さん、石原孝二さんが委員として  
決定された。 (報告: 商 真哲)

第2回 2016年11月20日

- ・事務局より現在の会員数と予算状況について報告。
- ・トレーニングコース実施委員会よりコース準備の現状  
について報告。会場・国内講師・通訳の手配・公募の通  
知と応募・選考方法・受講証発行の条件等が決定される。
- ・運営委員会の下部組織である各委員会 (広報委員会と  
トレーニングコース実施委員会) のメンバーおよびオブ  
ザーバーの必要条件や承認方法について定めた。双方と

も運営委員会によって承認を行い、ODNJP 正会員であることを条件とする。

- ・増加するマスメディアからの取材対応について、何らかのガイドラインを作る必要性が確認された。
- ・次年度の総会日程（2017年5月頃を想定）や運営委員会の実施スケジュールについて決定し、会員となるメリットをどう確保していくか議論された。

（報告：大谷 保和）

### 第3回 2017年1月8日

- ・事務局より現在の会員数と予算状況について報告。
- ・トレーニングコース実施委員会よりコース準備の現状について報告。講師宿泊先やコース参加者を確定したとのこと。自主勉強会や国内講師による講演についても話めていく。
- ・新年度より会員の名簿管理のルールを明確化することになった。
- ・発足1年が経とうとする中、ODNJPの組織としての体制や今後の方向性について議論した。OD普及のために組織がどのようなビジョンを持ちミッションを進めていくか、そのために最適な体制とはどのようなものかについて、様々な立場から話し合いがなされた。
- ・来年度ODNJP総会日時（2017年6月18日に決定）や段取りを決定。日本人講師によるOD関連の講演と同時開催とする。講演会講師は高木俊介さん・下平美智代さん。また総会までに運営委員会を2回程度開催することを決定。
- ・次年度活動予定について。トレーニングコース以外では、4/29にトム・アンキルさんによる、8/20にヤッコ・セイックラさんによる講演会の開催を予定。

（報告：大谷 保和）

### 第4回 2017年3月20日 13:00～14:00

東京大学駒場Iキャンパス 18号館 オープンスペース

当日は14時より「オープンダイアログのオープンダイアログ」が予定されていたため、1時間のみの開催でした。会員数の現状や4月29日の「未来語りのダイアログ」講演会やトレーニングコースの準備状況などについて報告されたほか、会報No.1の草稿の検討が行われました。なお第4回運営委員会に引き続き行われた「オープンダイアログのオープンダイアログ」では、福井里江さんをファシリテーターとして、ODNJPと日本におけるオープンダイアログの展開に関する対話が行われました。

（報告：石原 孝二）

## 07. 主催イベント報告①

### オープンダイアログセミナー

2015年11月29日（東京）、12月1日（大阪）

【会場】東京大学駒場Iキャンパス、大阪大学中之島センター

【講師】カリ・バルタネン氏、ミア・クルティ氏

【参加】東京：335名／大阪：171名

#### 【概要】

ケロプダス病院のスタッフ、カリ・バルタネン氏（精神科医）とミア・クルティ氏（看護師）を講師として招聘し、東京と大阪でオープンダイアログセミナーを開催しました。ケロプダス病院スタッフによる日本初のオープンダイアログのセミナーとなりました。東京会場では、335名の参加者が、大阪会場では171名の参加者があり、大変盛況でした。本セミナーで初めてオープンダイアログの概要に触れる方も多かったのではないかと思います。「ダンス」のようなバルタネン氏とクルティ氏のペアによる講演では、西ラップランド地区の精神保健システムやオープンダイアログ開発の歴史と思想的背景、オープンダイアログの主要原則（7つの原則）などについて丁寧な解説が与えられていきました。また、セミナーでは同年9月に行われたケロプダス病院研修の参加者による報告も行われました。

（報告：石原 孝二）

写真上：11月29日東京会場、写真下：12月1日大阪会場



## 07. 主催イベント報告②

### オープンダイアログワークショップ

2016年5月13日～15日

【会場】渋谷フォーラム8

【講師】ヤーコ・セイックラ教授、トム・エリック・アーンキル教授

【主催】オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン  
公益社団法人 青少年健康センター  
日本思春期学会

【協力】日本家族研究・家族療法学会

【参加】258名

#### 【概要】

オープンダイアログの理論的先駆者であるお二人を講師に向かえ、日本で初めてのオープンダイアログの本格的なワークショップを開催した。



写真右：ヤーコ・セイックラ教授 写真左：トム・エリック・アーンキル教授

### オープンダイアログ／未来予想型ダイアログ 視察研修

2016年9月1日（木）—10日（土）全10日間

【視察先】フィンランド

#### 【研修内容】

ケロプダス病院でオープンダイアログ視察研修、ロヴァニエミで未来予想型ダイアログ実践の視察研修。

#### 【企画責任者】

片岡豊：DSSA (Danisy Social Study Association)

ODNJP (Open Dialogue Network Japan)

#### 【概要】

9月6日から3日間、ケロプダス病院での視察研修を実施。精神科医、臨床心理士、P S W等職種の7名が参加。現地では他2団体も一緒に総勢17名でプログラムを体験しました。

ケロプダス病院のセラピスト2名が主に担当して下

さり、フィンランド及びトルニオにおけるオープンダイアログの歴史、歩みとシステムに関するレクチャーを受けました。病棟見学では日本との違いも多々感じました。今回特筆すべき体験としては以下のものが印象に残りました。

#### 1. 治療ミーティング等への同席

実際のクライアントとスタッフのセッションに、2～3名ずつに分かれて同席させて頂きました。その場ではフィンランド語のみなので会話の詳しい内容はわからないながら、医療的関わりだけでなく、クライアントの様々な問題においてその場で医師が担当部署に電話をする等、フレキシブルで柔軟・スピーディーな対応や、セッションの空気感を肌で感じる事が出来ました。

#### 2. 経験専門家との出会い

一定の専門教育を受けて、「経験専門家」として活躍するピアの方のお話を伺うことができました。実際のセッションやピアミーティングでの活動の様子や、経験に基づく立場の重要性、その方自身の人生におけるその仕事の意義など、心に響くお話でした。

また、ネットワークの中でもその専門性が職業的な専門性と同様に尊敬され尊重されていることにも感銘を受けました。

☆経験専門家の言葉「(相談の)電話をすることは、美容院の予約を取るより簡単。」

#### 3. ロールプレイとリフレクティング

17名の日本人参加者とケロプダス病院セラピスト2名が ①クライアント家族 ②セラピスト ③観察者(観察対象Ⅰクライアント、Ⅱセラピスト、Ⅲ全体)に分かれ、リアルな問題提起で行いました。ロールプレイセッション内は元より、終了後はクライアント、セラピスト間だけではなく、各グループ観察者とも何往復ものリフレクティングが行われ、大きな実感と学びを得、また分かち合うことができました。

☆ケロプダスセラピストの言葉「(セッションの中では)あなた自身の内側に起こる事をよく感じてください。」

(報告：村井 美和子)



## シンポジウム

### 「オープンダイアログ～日本での展開～」

2016年10月15日(土)

【会場】東京総合美容専門学校 7F マルチホール

【登壇者】ヤーコ・セイックラ (ユバスキュラ大学教授)  
斎藤 環 (筑波大学/ODNJP、コーディネーター)

信田さよ子 (臨床心理士、原宿カウンセリングセンター所長)

向谷地生良 (ソーシャルワーカー、北海道福祉大学教授)

【主催】公益社団法人青少年健康センター/オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン

【参加】285名

#### 【概要】

日本において、オープンダイアログを根付かせていくヒントを、国を越えてともに考えた4時間超。

前半は、各登壇者の自己紹介の後、オープンダイアログの主導者、フィンランドのセイックラ氏と会場をテレビ電話でつなぎ、1984年にオープンダイアログに取り組み始めた頃の経験やオープンダイアログの7つの原則について、事前に寄せられた質問への回答への答えの形で約1時間お話をいただいた。フィンランドの片隅で、最初にオープンミーティングという試みを始めた頃と、今の日本の状況が似ているというコメントも。西ラップランドにおいても、最初は「患者をコントロールできなくなるのでは」といういろいろな心配もあったが、その支援者からのコントロールがなくなったことで、クライアントや家族のリソースがあらわになったのだとセイックラ氏は当時を振り返った。

登壇者や会場も交えてのディスカッションでは、西ラップランドでの、オープンダイアログの精神分野以外の他分野への応用の状況にも触れられた。

続いて休憩をはさみ、前半での議論を踏まえつつ、登壇者が前回のシンポジウムからの1年間のそれぞれのフィールドでの実践で感じた発見や課題についての話題提供。さらにディスカッションで深めることとなった。

(報告：神保 康子)



## 第1回オープンダイアログ実践報告会

2016年11月20日(日) 13時～18時

【会場】東京大学駒場Iキャンパス 21KOMCEE EAST 2階K212

【主催】オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン  
【プログラム】

13:00-14:00 斎藤 環 (筑波大学/ODNJP)

14:00-15:00 下平 美智代 (認定NPO法人リカバリーサポートセンター ACTIPS 訪問看護ステーション ACT-J)

15:15-16:15 西村 秋生 (だるまさんクリニック)

16:15-16:45 三ツ井直子 (訪問看護ステーション KAZOC)、森川すいめい (みどりの杜クリニック)

16:45-17:45 総合ダイアログ (ファシリテーター：三ツ井直子、森川すいめい)

進行：石原孝二 (東京大学/ODNJP)

【参加】134名

#### 【概要】

2016年11月20日(日) 午後に第1回オープンダイアログ実践報告会が開催された。会場は、東京大学駒場Iキャンパス 21KOMCEE EAST K212で、定員100名を超えるODNJP会員(正会員・賛助会員)の参加があった。

まず、ODNJP共同代表の斎藤環(筑波大学)よりオープンダイアログの概要、歴史的背景、7つの原則についての説明があり、自験例の報告がなされた。次に運営委員の一人である下平美智代(訪問看護ステーションACT-J)より、ACTプログラムとオープンダイアログの共通点および相違点の説明、所属する法人における職員研修とチームの変化の様子および実践例が報告された。次に、運営委員会オブザーバーの西村秋生(だるまさんクリニック)より、自らが運営する診療所とACTチーム(ACTふあん)との協働における実践例が紹介され、検討すべき課題について述べられた。最後の報告は、運営委員の森川すいめい(みどりの杜クリニック)と三ツ井直子(訪問看護ステーションKAZOC)により、オープンダイアログの取り組みにおいてNeed-Adapted Approachが非常に重要な要素として紹介され、自ら運営する診療所と訪問看護ステーションでの取り組みについて報告がなされた。

すべての報告の後に、「総合ダイアログ」として、森川と三ツ井のファシリテートにより、フロアからの熱心な質問やコメント、およびそれを受けての報告者グループによる会話が行われた。

(文中敬称略 報告：下平 美智代)

## 08. 今後のイベント紹介

### 「未来語りのダイアログ」講演会

2017年4月29日(土・祝) 13:00～17:00

【会場】東京大学駒場 I キャンパス 21KOMCEE East K011 京王井の頭線「駒場東大前」駅

【参加費】ODNJP 会員 ¥2,000、非会員 ¥4,000

【募集定員】240名 ※定員に達したため締め切りました

【概要】昨年5月のワークショップの際に、ヤーコ・セックラ教授と共に来日した、トム・アンキル教授による「未来語りのダイアログ (Anticipation Dialogue)」をテーマとした講演会が2017年4月29日に開催される。

「未来語りのダイアログ」は、オープンダイアログとともに1980年代のフィンランドではじまり、現在ではあらゆる種類の社会的対人支援の場面で実践されているダイアログである。オープンダイアログは精神科領域において精神病的危機状態を対象にしているが、「未来語りのダイアログ」は多様な関係者がかかわるさまざまな社会的場面で用いられる。それは多様な関係者がかかわりながら長きにわたって変化が起こらなくなってしまったり、異なる立場の人々のあいだで不安や不満がくすぶり、関係者相互の信頼が揺らいでいたりして、どうしていいかわからなくなってしまった状況を打開するために行われるものである。

対人支援の専門家が、ある状況で直面する〈自分自身〉の不安・心配に対して心から援助を求めることによって、ファシリテーターが手配され、ネットワークが集められ、未来語りのダイアログが行われ、その手法の中心に「未来の想起」という方法がある。これは、未来において望ましい結果になっている状況を想定し、それにたどり着くための行動を計画する方法である。このようなダイアログを用いて、悩ましい状況に対して多くの〈声〉からなる理解(ポリフォニー)をつくりだしていく。

このような構造的な仕掛けをもった「未来語

りのダイアログ」は、多くの制度が乱立してその連携が課題でありながら、多くの場合さまざまな困難を抱える現在の日本の対人支援にとって、多くの示唆をもたらすものであろう。そのため、運営委員のひとりである京都の高木が自らの運営するACT-Kで、「未来語りのダイアログ」を学び取り入れるために創始者であるトム・アンキル氏、ロバート・アンキル氏を招請し、京都で私的な研修会を開催することになった。

その機会をとらえて、東京では4月29日に講演会を開催する。講演会には、京都で「未来語りのダイアログ」を学んだACT-Kのメンバーも出席する予定となっている。

詳細は、ODNJPのホームページから。多くの方の参加を期待している。

(紹介：高木 俊介)

### オープンダイアログ・トレーニングコース — ダイアログ実践の基礎コース —

【期間】2017年5月～11月

【受講要件】※参加募集は終了しております

- ・オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパンのメンバー(正会員と賛助会員)
- ・グループワークを重視するために、同じ施設・団体・法人内しは地域から複数で参加できる方を優先。かつ臨床現場でダイアログを実践し応用可能な立場の方を優先。

【概要】私たちは2015年に「オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン(ODNJP)」という組織を立ち上げ、この方法の普及啓発を進めてきましたが、このたびようやく、本格的なトレーニングコースを開始することになりました。

ODNJP会員の方はすでにご存じのこととは思いますが、今回、「オープンダイアログ」の本拠地であるケロプダス病院から、看護師のミア・クルティさん、精神科医のカリ・ヴァルタネンさんを招聘して、日本で初めての本格的なトレーニングコースを開催する運びとなりました。多忙な日常臨床の合間をぬって、私たちの要請に快く応じてくださったお二方に深く感謝いたします。

薬物や入院に極力頼らず、治療チームと患者ネットワークとの「対話」のもとで、修復と改善が起こること。その過程のすみずみまでが民主的で、透明性が保たれているということ。そこには神秘も奇跡もありません。ただのまっとうな「対話」があるばかりです。

オープンダイアログは、誰でも実践に参加できるほど、間口のひろいアプローチです。しかし、研修やスー



パーバイズを受けることによって、そのポリフォニックな対話空間は、無限に広がっていく可能性を秘めています。本研修は、実践のライセンス取得を目的とするものではありませんが、あなたの臨床活動や対話のありように、広がりと深さをもたらし、実り豊かなものにしてくれるでしょう。

このトレーニングコースの目的は、以下のようなものとなります。

- ・オープンダイアログについて知識を深める。
- ・ダイアログの実践を体験的に訓練する。
- ・グループやネットワークにおいてリフレクティング・プロセスを行う訓練をする。
- ・職場や日常生活の場で、ダイアログ実践を促進する。

ODNJPに参加されている方でしたらご存じの通り、「ダイアログ」はそのまま日常的な対話を意味しません。少なくともダイアログは「説得」や「議論」の対極にあり、しばしば病につながりやすいモノログを、健康的要素を引き出すような対話へと導く力があります。

こうした対話実践に習熟することで、臨床場面のみならず、職場や日常生活の場において、より民主的なコミュニケーションとともに親密な人間関係を築くことが可能になります。あるいは介助・支援、家族相談、教育・コミュニティワーク現場などで実践することにより、相互のリソースを協働的に引き出すことも容易になるでしょう。

コースの受講対象者としては、看護師、保健師、医師、PSW、心理士など、精神保健医療福祉領域の専門職の方に限定しておりますが、これは少しでもオープンダイアログの実践を日本の臨床現場に普及・定着させることを目指すためです。本来なら関心をお持ちの方すべてに受講していただきたいのですが、受講人数が40名と限定されており、専門職の方の要望が多いため、ご理解いただければ幸いです。

コースの内容は理論と演習が中心です。理論学習については、今のところ下記のテーマが決まっています。

1. トレーニングプロセスと参加者の紹介
2. ダイアログとは
3. 精神的クライシスにおけるダイアログ実践
4. 異なった治療アプローチの統合におけるダイアログ
5. 異なった社会ネットワークにおけるダイアログ
6. 急性期の精神的クライシスにおけるダイアログ
7. 家族支援と養育におけるダイアログ
8. 評価とトレーニングのまとめ

テキストとしてはセックラ教授とアンキル教授の共著である "Open Dialogue and Anticipations" の日本語版

を使用する予定です。本書の翻訳は私のチームが担当しており、本来ならばコース開始までに出版にこぎつけているはずだったのですが、思うように翻訳に時間が取れず、今回はプリントアウトを使うことになりそうです。ごめんなさい。

演習はスーパーバイジングを中心としたもので、受講生が担当している事例の治療について、講師の方からコメントや指導をいただく形になります。また、講師の滞在期間中に、希望する治療チームはそれぞれの現場で講師からのSVを受けることも可能です。

このトレーニングコースはODNJPとして、最初の本格的な事業となります。本コースが一定の成果を上げることができれば、来年も同様のコースを実施することが可能になるでしょう。今年希望してコースに参加できなかった方にも、来年またチャンスがあります。さらに将来的には、日本人のトレーナーを養成することで、オープンダイアログの実践は



写真左：カリ・ヴァルタネンさん 写真右：ミア・クルティさん  
(紹介：齋藤 環)

## オープンクラス

日本人講師による一般向け講習会を開催致します。

6月18日(日)《講師》高木 俊介／下平 美智代

7月9日(日)《講師》白木 孝二／野村 直樹

10月28日(土)《講師》矢原 隆行／三澤 文紀

12月3日(日)《講師》森川 すいめい／向谷地 生良

## 特別セミナー

① 4月29日(土・祝)

トム・エリク・アンキル氏&ロバート・ボブ・アンキル氏「フィンランド発 未来語りのダイアログとは？」

② 8月20日(日)

ヤーコ・セックラ氏による特別講演会(詳細未定)

③ 11月(日時・詳細未定)

オープンダイアログ・トレーニングコース講師による一般向け特別セミナー。

講師：ミア・クルティ／カリ・バルタネン

(紹介：村井 美和子)

## 09. 運営委員による寄稿

### 事の始まり・電光石火の産声

#### －オープンダイアログ－ネット

大熊由紀子

福祉と医療・現場と政策をつなぐネットワーク・志の縁結び係&小間使い  
国際医療福祉大学大学院 医療福祉ジャーナリズム分野

キェルケゴールに惚れ込んでデンマークに渡り、デンマークの福祉現場と思想を日本に紹介してきた片岡豊さんから、長いメールがとどいたのが、この始まりでした。

2015年1月14日の未明3時30分のことでした。抜粋します。

「東京大学の石原孝二さんという方をご存知でしょうか？僕はここ2年ほど、ノルウェーの精神科医のトム・アンデルセンさんが提唱したリフレクティング・プロセス、そしてその彼と一緒に開発されてきたフィンランドのオープンダイアログ（OD）の関係者と接触し、発祥地であるフィンランドのTornio という田舎町にある地域精神医療を見学させてもらいました。

当事者の人権と自己資源を尊重し、当事者を取り囲む人脈と連携しつつ、対話を通して回復の支援をする、とても素晴らしい精神治療の考え方で、30年近くの経験をもち、Tornio では80%以上のリカバリーの実績を上げています。北欧諸国や東欧諸国、そしてイギリス、アメリカなどにも広がりつつあります。

最近、精神科医の斎藤環さんという方が、ODをドキュメンタリー動画も使って紹介をされていると聞きました。ただ、まだ、現地の関係者と直接、接触しておられないようです。僕は、広島国際大学の矢原隆行さん、茨城大学の三澤文紀さんと一緒に情報収集していますが、ODの情報を広く日本に紹介できればと願っています。

石原さんや斎藤環さんたちと連携がとれれば、日本を変えていく展開につながってくるのではと思います。大熊一夫さんが、イタリアの動きを積極的に紹介されていますが、ODとは矛盾するものでも、対抗するものでもなく、逆に、イタリアの地域精神医療の具体的な展開方法のひとつとしてODがあると思います。もし可能であれば、一度、ゆきこさんにODの現状を見ていただきたいと思います。 ゆたか」

4時間後、私はこう、返事していました。

「石原さんと出会ったのは一昨年の「べてる祭り」。科学哲学専攻の「先輩」としての私を知ってくださっているそうでした。「オープンダイアログ」は医学書院の月刊誌「精神医療」に半年前に特集され一部では興味をもたれ

ています。白石正明さんというカリスマ編集者がいて、斎藤環さんを一昨年「べてる」に連れてこられました。そんなわけで、石原さん、べてるの向谷地生良さん、白石さん、斎藤さんとすぐに『縁結び』できます」

そして1月20日未明2時、片岡さんから思いがけないメールがとどきました。

「偶然にもフィンランドのOD中核人物の一人、Kari Valtanen さんから、3月下旬から4月上旬にかけて観光で訪日すると連絡がありました。その際に日本のOD関係者と今後の展開などについて情報交換をすることはできるということです」

講演や情報交換の成否は通訳次第です。幸い、パートナーがフィンランド人である吉備国際大学大学院の高橋睦子教授と、日本語が堪能で福祉の世界に造詣の深い橋本ライヤさん～私と旧知のこのお2人が意気に感じて通訳を引き受けてくださいました。

こうして電光石火、2015年3月30日、石原さんの本拠地、東大駒場で、オープンダイアログ・ネットワークが産声をあげることになりました。

片岡さんのメールから、わずか2カ月半後のことでした。

#### イタリアのオープンダイアログ

#### トリエステ・ドーミオ地区精神保健センター所長、精神科医 ピーナ・リデンテ（Pina Ridente）さんに聞く

（2017年1月17日）

大熊一夫（ジャーナリスト）

2015年9月にフィンランド北部のケロプダス病院で、初めてオープンダイアログの説明を受けたとき、「おや、これはどこかで聞いた話だなあ」と何度も思った。オープンダイアログの背後にある哲学が、僕がよく知るイタリア・トリエステ精神保健のそれと、似ているなんてもんじゃない、本当にそっくり同じなのである。

そこで、先々月の2017年1月、小人数でトリエステを訪ねたとき、ロベルト・メッツィーナ精神保健局長に「オープンダイアログを実践している職員に会わせてほしい」と依頼した。1月17日午前、精神保健局の会議室で待っていると、全身から快活さがほとぼり出る風情の女性精神科医ピーナ・リデンテさんが登場した。

人口24万のトリエステには、1980年以来、精神病院がなくなって、その代わりに4か所の地域精神保健センターが司令塔として機能している。彼女は、その一つドーミオ地区のセンター長で、地区住民約6万人の全精神保健ニーズに応える最高責任者だ。

2年ほど前、オープンダイアログに新たな可能性を感じるチャンスがあって、約3000ユーロ（40万円くらい）を自分で負担して、フィンランドのヤーッコ・セイックラ教授のもとで、セラピストの講習を受けた。そして、今、ドーミオ地区で実験中なのだという。

「あの完璧な透明化に惹かれました」

トリエステでは、1年半ほど前から、実験を始めました。今のチームは、精神科医2人、心理士2人、ナース3人です。私以外の人々のセラピスト研修は公費で賄われました。

イタリアでオープンダイアログの実践を始めたのは、トリノとローマでそれぞれ2チーム、イーモラ、サヴォナ、シチリアのどこか、それに私たちのトリエステ。全部で8グループです。

フィンランドのあの地方は、「重い人が出ない」「治療期間が短い」「回復の可能性が高い」「閉鎖的な精神病棟を使わない」「薬に頼らない」などいろいろ喧伝されていました。私たちは、Deistituzionalizzazione（脱施設化）をさらに進めたい気持ちから、オープンダイアログを試してみることにしました。

（精神病院がなくなったのに、何故、脱施設化なのですか？の問いに）私たちは、Istituzionalizzazione（大熊註：上記のように一般には「施設化」と訳されるが、「支配・被支配の関係化」といった意味がわかりやすい）はどこでも起きると考えています。私たちの地域精神保健センターといえども油断できません。

オープンダイアログとトリエステ精神保健は「地域で支える」「在宅のまま支える」「24時間以内に介入する」「発症の初期にかかわる」「旧来の精神医学をとりあえず脇に置く」といった共通点があります。原則が似ているのです。だからすんなりと受け入れることができました。

発症の初期というのは、心の中が流動化している時期です。この時期に素早く介入するのがポイントです。そして、介入の後は家族も巻き込んで、連続してかかわっていく、という点もトリエステとオープンダイアログは同じです。症状が固定化してしまうと、問題がわかりにくくなってしまいますから、スピードが大事なのです。

ただし、フィンランドの場合は、はじめの介入が職員2

人。それが継続していきます。トリエステは、2人に限定せずにセンターのスタッフ全員が共有します。どちらがいかは、私にはわかりません。



写真：ドーミオ地区精神保健センター長、精神科医のピーナ・リデンテさん

対応の仕方がフレキシブルなものも、共通しています。介入場所は、本人の要望で決まります。どこでもいいのです。決まったパッケージなんかありません。ご近所、職場、趣味仲間……といった人間関係のネットワークを大事にするのも同じです。

しかし、オープンダイアログは本当に寛容ですね。何かスキームを決めてやるのではない。本人の問題を解決する処方もなしに、ひたすら対話する。職員がやるのは対話の活性化。解決を急がない。不確定なことをそのまま受容する。ひたすら継続的な対話を続けていって、そこから何かが浮んでくるのを待つ。本人の発言をもとに、本人を交えたグループ全体で話し合いながら、解決の方向に向かう。

オープンダイアログは、本人の望む人物をすぐに巻き込む、本人を交えた全員の前でしか物事を決定しない、というのが実にいいですね。当事者抜きでは、決定も、話し合いさえも、しない。ある意味、完璧な透明化です。これ、トリエステも学ぼうとしていることなのです。トリエステの私たちは、民主的なつもりではあっても、当事者抜きで解決策を模索することが結構あります。家も職業も食事も失ってしまった人に出会ったときには、とにかく私たちも解決を急いでしまいがちですからね。

トリエステ精神保健局は、現在、15ケースの患者・家族をオープンダイアログ方式で支えています。利用者（患者）は18歳から25歳までの人たちです。若い人を選んだ理由は、親が健在で、しかもくたびれていなくて、協力が得やすいからです。

まだ実験段階ですから、成果について皆さんに話すのは、早いですね。

（通訳 佐藤康夫、文責 大熊一夫）

## 10. オープンダイアログに関する

### 海外の動向 2016年—2017年

フィンランド発祥のODへの関心は、ここ数年でヨーロッパ諸国・USAからオセアニア（ニュージーランド、オーストラリア）、アジア（フィリピン、台湾、中国、日本）、そして中近東まで及んでいます。

OD導入に欠かせないトレーニング・コースは、フィンランド以外では、ノルウェー、デンマーク、ポーランド、イギリス、USA、オーストラリア、イタリアの各国に設けられています。（注1）

この国際的な動きの中でも、イタリアの展開には関心を引かれます。精神病院を廃止した国イタリアでは、政府の支援のもとに2016年9月—2017年3月の期間に8つ都市（人口8—10万人規模）でODを試験的に導入し、現在、その評価調査が行われています。そして、この導入に先立って、ローマとトリノで、精神医療従事者80人を対象にOD基礎コース＋スーパーバイズが実施されました。

イタリアの精神医療、特にトリエステ・モデルは、多くの面で、ODと近い考え方だと報告されています。同時に、OD導入に際しては、人材、特に若手のスタッフの不足や、薬物治療への傾向が強いことなどが、バリアになっていると指摘されています。（注2）

同じような問題点は、他の調査報告書や、2016年夏に開催されたOD国際会議“21.International Network Meeting for the Treatment of Psychois”でも共通問題として報告されています。（注3）

とくに薬物治療に関しては、2016年6月にノルウェーで精神医療において無薬治療の法律が成立し、それを受けて北ノルウェーのTrommesø大学病院に無薬精神科病棟が設置されたことは興味深いことだと思います。（注4）

また2016年10月にスウェーデンのヨーテボルグにて「抗精神薬撤退の国際研究所」The International Institute for Psychiatric Drug Withdrawalが設立され、ODを代表するセイククラ教授が発起人の一人であることは、今後のODが展開する方向性を示していると考えられます。（注5）

注1:

- イギリスとUSA（マサチューセッツ）では3年間のトレーナー養成コースも提供されています。

- USAに関する情報：篠塚友香子（2017）アメリカで進むオープンダイアログ導入の動き（前編）、精神看護 Vol.20 No.2、医学書院

・UKおよびオーストラリアに関する情報：

<http://opendialogueapproach.co.uk>

<http://open-dialogue.net/>

注2

トリエステとOD相違点としては、ダイアログ主義と不確性に耐えることだとされています。

Implementing Open Dialgue in Italy: evaluation strategy and first annotations,. Raffaella Pocobello

Institut of Cognitive Science and Technologies – National Research Council, Trieste (OH資料)

注3

・北欧の情報：北欧諸国（ノルウェー、デンマーク、スウェーデン）におけるOD実践について179の学術研究論文を検証した論文。Adapting and Implementing Open Dialogue in the Scandinavian Countries: A Scoping Review

Niels Buus RN, Klaus Müller-Nielsen, m.fl.2016.

・リトニアで開催された第21回OD国際会議“21. International Network Meeting for the Treatment of Psychosis : Philip Benjamin, in <https://groups.google.com/forum/#!msg/ispsuk/RUK7K3Id4ns/CZOkqUoaAwAJ>

注4

Psykiatri uden medicin, in Psykologernes fagmagasin nr.2. 2017.

注5.

「抗精神薬撤退の国際研究所」発足記念講演：

<https://www.madinamerica.com/2016/11/psychopharmaceuticals-risks-and-alternatives-the-international-institute-on-psychiatric-drug-withdrawal-symposium/>

（報告：片岡豊）

## 11. メッセージ Messages

### Greetings to the land where the sun rises

Jaakko Seikkula



The very basic idea of dialogical practices is to contribute human service with more human attitude to people's suffering. As we all know, there are many – non-countable number – approaches in our fields. During the last decades, what have

taken over are approaches, where the symptoms and otherwise fragmented parts of humans are seen the basis "target" of services. Like psychiatric care, or social care, or teaching in schools and even in psychotherapy. These approaches are led by experts who think knowing better than the clients what is best for them. There are options. One of these is open dialogues in psychiatry or anticipation dialogues in other type of puzzles. In these dialogical practise humans voices are taken seriously and families are actively involved into the services. Therefor the thing that you are doing in Japan makes me extremely happy while taken client's voices seriously in your own way. I am extra happy because of knowing the cultural heritage of Japan, which emphasize for looking humans as full human being. In this way the Japanese network of open dialogues in addition in making change in the Japanese service culture contributes with new resources for us living in the Western part of the globe.

.....

**Tom Erik Arnkil,**

PhD (social policy), research professor emeritus

The approach I've followed for some 30 years in studying work processes, management and organizations in



psycho-social activities, education and other relational work could be described as "social experimenting". The aim has been to develop the activities, not merely to observe them – together with the workers, clients, managers and other partners

involved. Attempts to develop work are disturbances in the business-as-usual and afford therefore exiting means for social experimenting – namely because work systems bring into light much more in dealing with the disturbance than by carrying on their fluid everyday activity. However, the inputs have to be ethical and the disturbances positive – aiming at supporting and joining together the key resources of the clients, their social networks and professional helpers. Sustainability is a huge challenge: will the "developmental disturbance" only be a passing phase that the system can shake off and return to business-as-usual or will there be more profound changes.

Turning object-oriented and professional expertise-centred work into reciprocal dialogicity and networking has not always been successful in Finland, on the contrary, many network-dialogical experiments have not sustained. There are, however, clear, strong and inspiring cases of a sustainable cultural change. "We would have to make hard managerial decisions to push this development back", said Mr Ervast, the head of the Early Open Cooperation steering group at Rovaniemi. "People are used to respectful dialogicity and expect it."

How about Japan? If the approach was more or less "exotic" for many clients, professionals and managers in Finland, what will the cross-over bring into light in Japan? How will the clients and families take the approach, or the various professionals, or the organizations? What a social experiment! And moreover: how will the approach itself change and develop? All contexts are unique and nothing can be imported as such, the contexts talk back – and have to be listened to. This is what we've been trying to do in Finland: to develop the approach, not duplicate it, together with the local players, who, after all, are the experts of their contexts. And to reflect upon the basic underlying philosophy of dialogicity instead of mere techniques.

I can hardly describe how happy I am for the opportunity to come and train in Japan. Basho was one my favourite poets as a teen and I have been keen on the philosophy of zen ever since. I know that the dialogical approach with the emphasis on unity,

relational self and embodiment is not something unforeseen in Japan but has, in fact, a long and elaborate history in the country. It is a privilege to have this chance for co-development at this stage of life and I am very grateful for the colleagues in and around ODJPN to make it possible. Let us co-evolve!

.....

**Nick Putnam**  
**Open Dialogue UK**



Open Dialogue UK sends greetings to colleagues and friends in Japan developing the Open Dialogue approach. We have been working for the last 5 years to develop the approach in the UK.

So far we have organised the first full Open Dialogue training programme to be run outside of Finland. The first of these three year programmes commenced in London in April 2015 and included teams from NHS Trusts, as well as teams working in public services in several international countries. We also welcomed independent practitioners and peers onto this programme. The next programme will be commencing in September 2017. This training is led by senior Finnish trainers as well as other leading international practitioners/trainers.

In addition to the above, we are also running a one year foundation training, which started in London in June 2016. This is being led by Volkmar Aderhold and Petra Hohn, who have run many such programmes in a variety of countries internationally, including the Parachute Project in New York City, along with Mia Kurtti from the Western Lapland team, and Nick Putman (Open Dialogue UK). The next foundation training will be starting in June 2017.

Our offices are located in Dalston, London, and here we meet with families/networks, using many of the principles of the Open Dialogue approach. We also arrange home visits in the London area.

In addition to the above we have run many seminars and conferences across the UK over the last few years, helping to raise awareness about the approach and how it is developing nationally and internationally.

We are now travelling internationally to deliver our foundation training overseas. This year we are running the programme in Queensland, Australia, and we are exploring options for additional locations/countries in 2018.

Wishing you all well in your work.

.....

**保坂展人（世田谷区長）**

私には、オープンダイアローグの理念と思想、そして手法は、精神医療に止まらない「魔法の鍵」を示唆しているように感じます。私もまた、オープンダイアローグを学び、また理解を深めながら議論するひとりになりたいと思います。



## 12. Open Dialogue Network Japan- Overview

### Open Dialogue Network Japan

The purpose of this organization is to provide information and educate about the Open Dialogue Approach, which was developed in western Lapland in Finland, and to contribute to the dissemination of high-quality practice of Open Dialogue in Japan.

### History

**March 30, 2015:** Establishment of the Network

**September 1-2, 2015:** Study visit to Keropudas Hospital (Coorganized by DSSA)

**September 5, 2015:** Tamaki Saito was appointed as the interim chairperson

**November 29- December 1, 2015:** Open Dialogue Seminar in Tokyo and Osaka

**May 13-15, 2016:** Open Dialogue Workshop in Tokyo (Coorganized by SKC and Japan Society

Adolescentology, with support of)

**June 18, 2016:** First Assembly. Joint-Chairpersons, Steering Committee Members, Secretary General were appointed.

**July 9, 2016:** Constitution was established.

**September 1-10, 2016:** Second Study visit to Keropudas Hospital (Coorganized by DSSA)

**October 15, 2016:** Symposium: Future development of Open Dialogue in Japan (Tokyo) (Coorganized by SKC)

**November 20, 2016:** First Meeting of Practice Reports

**April 29, 2017:** Anticipation Dialogue Lecture

**May 2017-November 2017:** First foundational Training Course will be held (Instructors: Kari Valtanen and Mia Kurtti)

## Officers

### Joint-chairpersons (in alphabetical order):

Kohji ISHIHARA, Yutaka KATAOKA, Tamaki SAITO, Shunsuke TAKAGI

### Members of Steering Committee

Taro UEMURA, Yuichi OI, Yasukazu OGAI, Kazuo OKUMA, Yukiko OKUMA, Shinichiro SASAHARA, Michiyo SHIMODAIRA, Naoaki SHO, Yasuko JIMBO, Hiroshi TAKEBATA, Takeshi TAMURA, Naoko MITSUI, Ikuyoshi MUKAIYACHI, Miwako MURAI, Suimei MORIKAWA, Nobuaki MORITA, Naoki NOMURA, Masaaki SHIRAIISHI, Koji SHIRAKI, Takayuki YAHARA, Tsuyoshi, WATANABE

### Secretary General

Masayuki TOKIMORI

### Honorary Members

Tom Erik Arnkil, Jaakko Seikkula

**Contact:** network@opendialogue.jp

## Constitution

Constitution of the Open Dialogue Network Japan

(Translation as of July 9, 2016)

Established on July 9, 2016

(Name)

Article 1. The official name of this organization is Open Dialogue Network Japan (ODNJP).

(Purpose)

Article 2. The purpose of this organization is to provide information and educate about the Open Dialogue

Approach, which was developed in western Lapland in Finland, and to contribute to the dissemination of high-quality practice of Open Dialogue in Japan.

Article 3. In order to achieve the purpose outlined in Article 2, this organization will conduct the following:

- (1) Communication and cooperation with foreign organizations on Open Dialogue in Finland and other areas,
- (2) Seminars, lectures, and training courses,
- (3) Publication of a newsletter,
- (4) Other activities necessary to achieve the purpose outlined in Article 2.

(Membership)

Article 4. This organization has three kinds of membership: full membership, supporting membership, and honorary membership.

Article 5. The procedure for entering into and leaving from this organization will be developed by the Steering Committee.

Article 6. A full member has the right to attend to and vote in the general meeting.

(Membership dues)

Article 7. Membership dues

Full member: 6,000 yen

Supporting member: 3,000 yen

Honorary member: gratis

The membership expires on March 31, regardless of when the member joined.

(Governance structure)

Article 8. Officers

Joint-chairpersons

Members of Steering Committee

Secretary general

Article 9. Joint-chairpersons, nominated full members of the ODNJP and the secretary general make up the Steering Committee which is responsible for the management of this organization.

Article 10. Joint-chairpersons represent this organization; the secretary general presides over the secretariat, which is responsible for the financial management of this organization. Joint-chairpersons and the secretary general are responsible for the daily business of this organization.

Article 11. The Steering Committee can set up sub-committees.

(General meeting)

Article 12. At the general meeting, joint-chairpersons, the members of the Steering Committee and the secretary general will be appointed. The constitution will be amended and a basic action plan will be set up at the general meeting.

Article 13. The Steering Committee will explain the activities and financial management of the organization at the general meeting.

Article 14. The general meeting will be held regularly, at least once per year.

Article 15. The general meeting will commence if over half of all full members (including proxies) attend the meeting.

Additional Clause 1. This constitution has been set up by the Steering Committee based on the decision at the first general meeting held on June 18, 2016 and will be applied from July 10, 2016.

Additional Clause 2. The fiscal year of this organization is from April 1 to March 31.

オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン

<https://www.opendialogue.jp/>

ODNJP 会報 No.1

2017.04.05 発行

編集委員長：石原孝二

編集委員：神保康子